

聖書・今日のいのり

善い業のために

「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。」

エフェソの信徒への手紙2章8～10節

天は自ら助くる者を助く

今から一四〇年ほど前、明治の初めに発行された『西国立志編』という本があります。努力を重ねて成功をとげ幸福をつかんだ西欧の人々の伝記集で、巻頭の「天は自ら助くる者を助く」という句はたいへん有名です。この本は明治の青年たちの心をとらえベストセラーとなりました。なぜ、この本がそんなに読まれたのでしょうか。

それまで、人の生き方は生まれついた身分で決められていました。人は親のように生きるものであり、「将来を夢みる」ことなどできなかったのです。しかし明治になってそれまでの身分制度が崩れ、努力次第で成功できる道が開けました。これからは自分の人生を切り開いていくことができる、がんばればどんな人生をも歩むことができる、そういう夢や大志、野心を抱くことができるようになった時代の若者たちを『西国立志編』は励まし力づけたのでした。

「天は自ら助くる者を助く 天は自分で努力する者を助けてくれる」という考え方は、日本の近代を支え導く思想となりました。努力によって幸せをつかむことができる、たとえ苦しい境遇の中にあっても、がんばればそこから抜け出し幸せにたどりつく、努力は必ず報われる、いや、報われないはずはない……。今日に至るまで日本人はそういう考え方をよりどころにしています。

将来の幸せや成功を夢みてせいっぱい努力すること自体は、もちろん決して悪いことではありません。しかし、これには実は深い問題が伴っています。「努力すれば人生は成功する、天は自分で努力する者を助けてくれる」という考え方は、容易に「いつまでもうまくいかない者は自分の努力が足りないのであり、努力できない本人に問題がある」と、裏返ってしまうのです。

どんなにがんばっても結果が出ず、報われないことがあります。就職活動にかけずり回ってもなかなか職場がみつからず、子育てや家事を一生懸命つとめても家庭の幸せにたどりつけず、働いたくても健康が許さなかったり、置かれた境遇があまりに厳しく難しいものだったりして、思うようにならないのです。それでも「うまくいかないのは、まだまだ努力が足りないからだ。もっとがんばって励んできたら、成し遂げられるはずだ、努力は必ず報われるのだから」とされてしまったら……。

「努力は必ず報われる」という考え方は、知らず知らずのうちに、成功できなかった者、人生にうまくいかなかった者を「努力が足りない、努力していない」と裁き、責め、さげすむ、冷たいまなざしをも生み出してしまうのです。

他者を冷ややかにみるばかりではありません。もっとつらいのは、自分で自分を責めるようになってしまうことです。うまくいかないのは私の努力が足りないんだ、私がちゃんとしなからこうなってしまった、私が悪い、私はだめなんだ…。そんなふうに自分自身を責め、裁き、おとしめることにもなってしまいます。

「努力すればきっとうまくいく」という考え方は、確かに多くの人を力づけ励ましてきました。しかしまた、別の人々にはいっそうの苦しみをもたらしてしまいました。「天は自ら助くる者を助く」とは、決してすべての人を救うことばではなかったのです。

自らの力によるのではなく

では、キリスト教は、聖書は、何を教えているのでしょうか。やっぱり、「努力しなさい、がんばりなさい、そうすればうまくいく、救われる」と教えるのでしょうか。

「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です（エフェソ二章八節）」とは、決定的に重要なことばです。「神の救いは、自分の力、自分の努力によってもたらされるのではない。神は、あなたの努力にかかわりなく、恵みによって、つまり、ただで、救いをもたらしてくださる。救いは神の賜物、プレゼントなのだ」というのです。

だから、キリスト教は、ほんとうはショッキングな、とんでもない教えです。この社会を支え導いてきた思想、あたりまえに思ってきた考え方をくつがえすのです。

「あなたがどんなにがんばったとしても、それと救いとは関係ない。救いは努力によって勝ち取るものではなく、神さまからの賜物、プレゼントとして、ただで与えられるものなのだ」というこのことばを、どう受けとめるでしょうか。もし、「そんなバカな、努力したかどうかに関係ないなんて、そんなことがあってたまるか」と、拒絶したなら、その賜物を受け取ることはできません。けれども、「がんばることなどとてもできない、こんな私にも救いは与えられる」と信ずるとき、神のプレゼント、賜物を受け取っているのです。

信仰とは、努力ではなく、まさに信じることです。「こんなにも力足りず、結果を出すことなどできなかった私。でも、そんな私をすら、神さまは救ってくださる。苦しみや悩みから解放してくれる」と。

もし、そんなふうに信じられたら、たとえ努力が及ばなくてもいいんだと信じられたら、少なくとも自分自身を責めさいなみ、追いたて、苦しめることから解放されるでしょう。そしてまた、人を裁き、責め、おとしめることから解放されるでしょう。うまくいかなかった者に対して、うまくいった者が「自分は努力してきたんだ」と誇ることもなくなるでしょう。「行いによるものではありません。それは、だれも誇ることはないためなのです（九節）」。

善い業のために

では、人は何をすればいいのでしょうか。努力に意味がないのなら、何もしないでいいのでしょうか。

「わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備して下さった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです（一〇節）」とあります。

「あなたは、何かをするため、善い業を行っていくために造られた」と聖書は告げるのです。神さまは、何か善いことをするようにとあなたを造ってくださっている、たとえそれが何なのか、まだよくわからないとしても、神さまはあなたのために、あなた自身がなすべき何かを用意している、というのです。それをする事自体が、自分が造られ、存在し、生きていることの意味なのだから、その結果は関係ない、結果が出なくてもいい、たとえうまくいかず、失敗したとしても、成功して何かを勝ち取ることができなかつたとしても、結果のためでなく、その善い業を行うためにこそ、私は造られ、存在している…。

神さまが私に何をさせてくださるのか、どんな善い業をさせようとはからってくださっているのか、それを思うと胸がわくわくしてこないのでしょうか。私の人生には、なすべきことがあるのです。

それが何であるのか、私はどんな善い業のために造られているのか、知ることができるよう、祈り求めましょう。自らの努力で救われなければという、自分をも他者をも苦しめる束縛から解放され、神さまからのプレゼントを、信じて受けとることができるよう、祈りましょう。そうすることによって、うまくいかなかった者に対する冷たいまなざしに満ちたこの社会が、善い業にあふれるものとなるように、共に祈りましょう。

久世そらち （日本キリスト教団札幌北部教会牧師）
一九六二年札幌生まれ。東京大学文学部、東京神学大学大学院、旭川豊岡教会牧師・ひまわり幼稚園園長を経て現職。太平子どもの家園長。